

早

第3回  
早春の会  
合唱団  
演奏会

2004.9.20.Mon.  
2:00 p.m. (開場1:30)  
東京文化会館小ホール

春の会

## プロフィール

- 1993年 3月 早春の会合唱団として発足  
常任指揮者に松田匡史氏を迎える
- 10月 第39回目黒区合唱祭に参加（目黒公会堂）以降毎年参加
- 1994年11月 第36回都民合唱コンクール 小ホール部門第一位
- 1995年10月 第37回都民合唱コンクール 招待演奏（東京文化会館大ホール）
- 1996年10月 第38回都民合唱コンクール 小ホール部門第一位
- 1997年11月 第39回都民合唱コンクール 招待演奏（東京文化会館大ホール）  
織田久男先生謝恩コンサートに出演（こまばエミナース）
- 12月 東京文化会館主催クリスマスコンサートに出演（東京文化会館小ホール）
- 1998年 2月 世田谷ロータリークラブ35周年祝賀コンサートに出演  
（東急文化会館ゴールデンホール）
- 1999年 8月 常任指揮者に井上実氏を迎える
- 11月 上野の森コーラスパークに参加（東京文化会館大ホール）
- 2000年 6月 第1回早春の会合唱団演奏会（こまばエミナース）
- 10月 第41回都民合唱コンクール 大ホール部門第四位
- 2001年 2月 常任指揮者に玉置清明氏を迎える
- 9月 上野の森コーラスパークに参加（東京文化会館大ホール）
- 10月 第42回都民合唱コンクール 大ホール部門入賞
- 2002年 7月 第2回早春の会合唱団演奏会（東京文化会館小ホール）
- 9月 第43回都民合唱コンクール 大ホール部門奨励賞
- 10月 ウィーンピアノ四重奏団と共演（女性のみ）めぐろパーシモンホール
- 2003年 2月 都立目黒高校合唱大会招待演奏 めぐろパーシモンホール
- 9月 第44回都民合唱コンクール（東京文化会館大ホール）
- 2004年 9月 第3回早春の会合唱団演奏会（東京文化会館小ホール）

## 御挨拶

名誉顧問 織田久男

早春の会合唱団の定演も、本日、第三回を迎える運びとなり、関係者として大変喜ばしく思っております。「継続は力なり」という言葉があるそうですが、この、定演を今年も続けてやるのだという目標が、団員たちの大きな力となり励みとなつて、相当な無理をも克服して今日を迎える事が出来たものと思います。もちろん、その間の御家族の御理解と御支援があつての事であるのは言うまでもありません。ここで心からの御礼と感謝を申し上げます。

さて最近、合唱を聴いて鳥肌が立つという、生理的反応を伴った感動を得る事は滅多に無くなりました。一方、技術的には高度に熟練していて、その見事さに感心はするものの、心を揺さぶられるような感動を伴わない、一種の『響きの音色美』のみを追求した、蒸留水のように味気のない演奏が氾濫しています。疵のない技術の完璧さを追求するあまり、音楽として一番大事なものをどこかへ置き忘れてしまった結果である、としか言いようがありません。合唱が、人間の声を表現媒体とした『音楽』である事を、改めて銘記する必要があります。

本日の早春の会合唱団の演奏はどうでしょうか。私も皆様方と御一緒に、どんな演奏が聴けるのか大いに楽しみにしております。

織田久男先生 都立目黒高等学校で教鞭をとられていた1964～1971年に、音学部をただならぬ熱意と愛情をもってご指導された。

## ご挨拶

本日は「早春の会合唱団」の演奏会にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。前回の演奏会から2年が過ぎ、今年の見事なまでの夏を乗り越えて、ステージに這い上がることができました。

この間に、幾たびか織田久男先生に練習を見ていただく機会にも恵まれ、改めて音楽の取り組み、表現の難しさに魅せられた団員もいたことでしょう。

作詩から作曲家がどのような感動をもって曲に昇華されたのかを忖度しながら、時間をかけて読み取り表現していく過程は、結果はともあれ、楽しいものです。

二人の指揮者を迎えて二つの組曲を柱に、心から合唱を楽しみたいと思います。演奏会を開催するにあたり、ご家族、友人、早春の会の皆様に感謝とお礼を申し上げます。

演奏会実行委員長 加藤修司



自然における神の栄光 ベートーベン作曲

---

木下牧子 作品

春に

めばえ

なぎさの地球

---

「風に寄せて」 立原道造 作詩・尾形敏幸 作曲

その一

その二

その五

---

休憩

「水のいのち」 高野喜久雄 作詩・高田三郎 作曲

雨

水たまり

川

海

海よ

---

男声合唱 <眠りの精> 堀内敬三 訳詞・ブラームス作曲・青島広志 編曲

<小夜曲> ヴォルフ作詩・マルシュネル作曲

<いざ起て戦人よ> 藤井泰一郎 作詩・グラナハム作曲

女声合唱 <おおひばり> 高野辰之 作詩・メンデルスゾーン作曲

<故郷を離るる歌> 吉丸一昌 作詩・ドイツ民謡・入野義朗 編曲

美しく碧きドナウ ヨハン・シュトラウス作曲

---

指揮 玉置清明・井上実 / 伴奏 仲谷智子

早春の会合唱団

## 「春に」 「めばえ」 「なぎさの地球」

木下牧子の音楽はとてもあたたかい。信頼感に包まれた心地よさに安心して身をまかせられる感じと言ったらいいだろうか、短い1曲でも心が満たされる豊かな内容を持っている。

「春に」は1989年の教育音楽（音楽の友社）に掲載されて以来、中学高校生に圧倒的人気を獲得して歌われている。「めばえ」（'97）はNHK合唱コンクールの課題曲として作曲され、美しい響きで生命の脈動を描いた自然への賛歌。

「なぎさの地球」（'02）もNコンの課題曲で、環境破壊をテーマとしつつ、色彩感豊かな和声で、人間の活動へのいとおしさと自然への畏敬を見事に表現している。

## 風に寄せて

「風に寄せて」は昭和の初期に活躍し、24歳という若さで夭折してしまった詩人立原道造の、浅間高原の自然への感動や、自らの心の動きをうたった3篇の詩に、同じくその地を訪れ、共感した尾形敏幸の作曲によるものです。

この曲は、私たちの合唱団としてはじめて取り組んだ曲です。練習を積み重ねるにつれ、この詩と音楽の奥深さに幾度か立ち止まってしまうこともありました。

私たちの演奏を通して、軽井沢の自然の美しさ、そして作詞・作曲者の感動を、会場の皆様と少しでも共有することができれば幸いです。

## 水のいのち

この「水のいのち」を歌った人は、誰もが、高野喜久雄の詩に捉えられ、生活の中の様々な場で高田三郎の音楽を反芻し、自身の内面への問いかけを繰り返してゆくのだと思う。

合唱の練習は同じ部分を何度も繰り返す。そのたびに詩の言葉の一つ一つが密度を増しながら、音楽とともに深く心に刻みこまれ、いつか、いのちを持った全体像として自分の中に染みわたってゆく。「一途な」「焦がれる」そして「空の高み」。繰り返される言葉が自分の願いと重なってゆく。

1965年に作曲されて以来、非常に多くの合唱団が演奏し、たくさんの人々の心を捉えてきた。もし、高校1年の時に織田先生の指揮する「川」を歌わなかったら！私は今とは違った自分になっていたような気がする。あれから35年、しかし自身への問いかけはなお同じ所でとどまっている。

今日の演奏ののち、問いはどれほど深まるのだろう。いつか昇華できる日は来るのだろうか。

春に 作詞 谷川俊太郎

この気もちはなんだろう  
目にもえないエネルギーの流れが  
大地からあしのうらを伝わって  
ぼくの腹へ胸へそしてのどへ  
声にならないさけびとなって  
こみあげる  
この気もちはなんだろう  
枝だの先のふくらんだ新芽が  
心をつつく  
よろこびだ  
しかしかなしみでもある  
いらだちだ  
しかしやすらぎがある  
あこがれだ  
そしていかりがかくれている  
心のダムにせきとめられ  
よどみ渦まきせめぎあい  
いまあふれようとす  
この気もちはなんだろう  
あの空のあの青に手をひたしたい  
まだ会ったことのない  
すべての人と  
会ってみたい話してみたい  
あしたとあさってが  
一度にくるといい  
ぼくはもどかし  
地平線のかなたへと歩きつづけたい  
そのくせ  
この草の上でじつとしていたい  
この気もちはなんだろう

めばえ 作詞 みずかみかずよ

みごもる  
ははのだいちは  
そこぶかくたいどうをはじめた  
いてついた  
かたいつちのおもては  
つかれきって  
ねむったままだけれど・・・  
きびしいさむさからまもられて  
ふくらみつづけた  
ちいさな海のちたち  
おしあい  
へしあい  
ぐいぐいと  
あふれるちからで  
くらやみから  
ひかりへむかつて  
のびあがってくる  
つたわる  
つたわる  
ちからづよいこどう  
ふるえる  
ふるえる  
ゆるみはじめたたいき  
はるのめは  
やがて  
いつせいに  
うるむ

なぎさの地球 作詞 大岡 信

なんにも思い出すものが  
なくなつたとき  
私はさいごに  
何を思い出すだろう  
なんでもない夏のゆうぐれ  
なんともない夏のなぎさの  
ひしやげたゴムまり  
ひとかかえもある藻のかたまり  
ひとかかえもない魚の骨  
見捨てられ  
踏んづけられて  
思い出の水族館に  
沈んでいる海の幸  
なんにも思い出すものが  
なくなつたとき  
私は何を思い出すだろう  
なともないなぎさの上の  
砂にかいた丸や四角は  
帆船になつて私の中に滑り込み  
走り去るだろうか  
私はだれかを呼ぶだろうか  
それとも呼ぶのはやめるだろうか  
そのとき私は思うだろうか  
燃えるいのちの夏の季節は  
あまりにも短かつたと  
それとも私は思い出すだろうか  
でこぼこの流木の  
思いがけない硬いこぶこぶ  
揺れやまぬ思想の城より  
何倍もどつしり重みをもっていた  
不思議なこぶの重い手触り

風に寄せて

立原道造 作詩

その一

さうして小川のせせらぎは 風がいるから  
あんなにたのしく さざめいている  
あの水面のちいさいかげのきらめきは  
みんな 風のそよぎばかり・・・・・・・・

小川はものをおし流す  
藁屑を 草の葉っぱを 古靴を  
あれは風がながれをおして行くからだ  
水はとまらない そして 風はとまらない

水は不意に身をねぢる 風はしばらく水を離れる  
しかしいつまでも川のうえに 風は  
ながれとすれずれに ひとつ語らひをくりかへす

長いながい一日 薄明から薄明へ 夢と昼の間に  
風は水と 水の翼と 風の臉と 甘い囁きをとりかはす  
あれはもう叫ぼうとは思わない 流れて行くのだ

その二

風はどこにいる 風はとほくにいる それはいない  
おまへは風のなかに 私よ おまへはそれをきいている  
・・・・うなだれる やさしい心 ひとつの蕾み  
私よ いつかおまへは涙をながした 頬にそのあとがすぢひいた

風は吹いて それはささやく それはうたふ 人は聞く  
さびしい心は耳をすます 歌は 歌の調べはかなしい 愉しいのは  
たのしいのは 過ぎて行った 風はまたうたふだろう  
葉っぱに わたしに 花びらに いつか帰って  
待っている それは多分 ぢきだらう 三日月の方から  
たったひとり やがてまたうたふだらう 私の耳に  
梢に 空よりももっと高く なにを 何かを くりかへすだらう

風はどこに 風はとほくに けれどそれは帰らない もう  
私よ いつかおまへは ほほえむでいた よいことがあった  
おまへは風のなかに おまへは泣かない おまへは笑はない



## その五

夕ぐれの うすらあかりは 闇になり  
いま あたらしい生は 生れる  
だれが かへりを とどめられよう！  
光の 生れる ふかい夜に

さまよふやうに  
ながれるやうに  
かへりゆけ！ 風よ  
ながれのやうに さまようやうに

ながくつづく まどろみに  
別れたものらは はるかから ふたたびあつまる  
もう涙するものは だれもない・・・風よ

おまへは いまは 不安なあこがれで  
明るい星の方へ おもむかうとする  
うたふやうな愛に 担はれながら

水のいのち 高野 喜久雄 詩

### 1 雨

降りしきれ 雨よ  
降りしきれ すべて 立ちすくむものの上に  
また 横たわるものの上に

降りしきれ 雨よ  
降りしきれ すべて 許しあうものの上に  
また 許しあえぬものの上に

降りしきれ 雨よ  
わけへだてなく 潤れた井戸  
踏まれた芝生 こと切れた梢  
なお ふみ耐える根に

降りしきれ そして 立ちかえらせよ  
井戸を井戸に 庭を庭に  
木立を木立に 土を土に

おお すべてを  
そのものに  
そのもののてに

### 2 水たまり

わだちの くぼみ  
その この  
くぼみにたまる  
水たまり  
流れるすべも めあてもなくて  
ただ だまって  
たまるほかはない  
どこにでもある 水たまり  
やがて  
消え失せてゆく  
水たまり  
わたしたちになにしている  
水たまり

わたしたちの深さ  
それは泥の深さ  
わたしたちの言葉  
それは泥の言葉  
泥のちぎり  
泥のうなずき  
泥のまどい

だが わたしたちにも  
いのちはないか  
空に向かう  
いのちはないか  
あの水たまりの にごった水が  
空を うつそうとする  
ささやかな  
けれどもいぢぢないのちはないのか

うつした空の  
青さのように  
澄もう と苦しむ  
小さなころ  
うつした空の  
高さのままに  
在ろう と苦しむ  
小さなころ

### 3 川

何故 さかのぼれないか  
何故 低い方へゆくほかはないか

よどむ淵 くるめく渦のいらだち  
まこと 川は山にこがれ  
きりたつ峰にこがれるいのち  
空の高みにこがれるいのち

山にこがれて 石をみごもり  
空にこがれて 魚をみごもる  
さからう石は 山の形  
さかのぼる魚は 空を耐える

だが やはり 下へ下へと  
ゆくほかはない 川の流れ

おお 川は何か  
川は何かと問うことを止めよ  
わたしたちもまた  
同じ石を 同じ魚を みごもるもの  
川のこがれを こがれ生きるもの

### 4 海

空をうつそうとして  
波一つなく 風ぐこともある  
岩と混じれなくて  
ひねもす たけり狂うこともある

しかし 凡ての川はみな  
そなたをさして常に流れた  
底に沈むべきものは沈め  
空にかえすべきものは 空にかえした

人でさえ 行けなくなれば  
そなたを さしてゆく  
そなたの中の 一人の母をさしてゆく

そして あなたは 時経てから 充ち足りた死を  
そっと岸辺にうち上げる  
みなさい これを 見なさい と云いたげに

### 5 海よ

ありとある 芥  
よごれ 疲れはてた水  
受け容れて すべて 受け容れて  
つねに あたらしくよみがえる  
海の 不可思議

休まない 汀  
波の指 白い指 くりかえし  
うまく くりかえし  
億の砂 億の小石を  
数えつづける 海の 不可思議

くらげは 海の月  
ひとでは 海の星  
海螢 海の馬 空にこがれ  
あこや貝は 光を抱いている

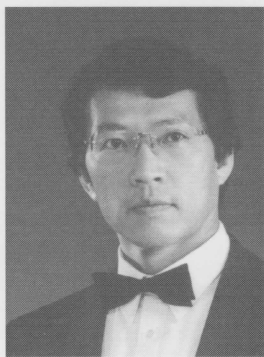
そして 深く暗い 海の底では  
下から上へ まこと 下から上へ  
雪は 白い雪は 降りしきる

おお 海よ たえまない 始まりよ  
あふれるに みえて  
あふれる ことはなく  
終わるかに みえて  
終わることもなく  
億年の むかしも いまも  
そなたは いつも 始まりだ  
おお 空へ 空の高みへの  
始まりなのだ

のぼれ のぼりゆけ  
そなた 水のこがれ  
そなた 水のいのちよ

たとえ 己の重さに 逆らいきれず  
雲となり  
また ふたたび降るとしても

のぼれ のぼりゆけ  
みえない つばさ  
いちずな つばさ あるかぎり  
のぼれ のぼりゆけ おお



■指揮 玉置 清明

都立目黒高校、東京芸術大学音学部声楽科卒業。  
教職を軸に独唱、合唱、オーケストラ、吹奏楽、  
編作曲、美術制作など幅広い活動を続けている。  
熊谷守一大賞展等多くの公募展に入賞。早春の  
会合唱団、秦野市民交響楽団指揮者。神奈川県  
立秦野高校教諭。



■指揮 井上 実

都立目黒高校、国立音学大学声楽科卒業。  
早春の会合唱団指揮、小学校の指導教材中心と  
した作曲・編曲を行っている。  
リコーダーの演奏及び講師活動などを通して、  
幅広く教育活動に寄与している。  
主な作品「動物の森」「花のうた」  
(共にトヤマ出版)



■ピアノ 仲谷 智子

都立目黒高校、武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。  
久富綵子、澤田紀子の各氏に師事。  
ピアノ教室主宰、サロンコンサート等の企画、  
演奏活動を行っている。  
早春の会合唱団創団時より伴奏をつとめる。

S O S O

2004.9.20 デザイン・編集 PLANTA